

懸賞論文(学生論文)審査結果の報告

一般社団法人 建設コンサルタンツ協会
広報事業専門委員会

平成25年度は「日本が元気になるための社会資本整備のあり方とは」をテーマとして、昨年6月末から約3ヶ月間(締め切り9月30日)、「学生論文」の募集を実施し、大学院、大学あわせて23編の応募をいただきました。今回は最優秀賞論文1編、優秀賞論文1編と佳作論文3編を決定しましたので、概要を紹介します。

1. 審査結果

- ・応募結果：23編
 - ※分野別：理工系21編、文系2編
 - ※学校別：大学院9編、大学14編
- ・審査結果
 - 最優秀賞：1編
 - 優秀賞：1編
 - 佳作：3編

■最優秀賞論文

「人間らしさを育む都市を目指して」
高橋 利之(京都大学大学院)

■優秀賞論文

「高齢者特区制度の導入と社会資本整備」
松原 龍彦(長岡技術科学大学大学院)

■佳作論文

「災害が起こっても元気な日本であるには」
佐藤 大樹(長岡技術科学大学大学院)
「社会資本整備に向けた財源確保と情報収集についての提言」
雅楽川 朋大(東京大学)
「みんなで築く “Humane JAPAN”」
川端 康正(千葉大学大学院)

2. 審査方法と入賞論文

平成24年度のテーマは、人口減少や少子高齢化の進展に加え、厳しい財政状況の下で十分な社会資本整備も難しい状況となっていたことから「次世代に繋げてゆきたい魅力あるあなたの“まち”とは」でしたが、このような状況に加え、これまで私たちが享受してきた社会資本施設は老朽化・劣化の時期を迎え、適切に保全し、安全・安心の社会を維持することが課題となっています。また、異常気象による豪雨災害が多発するとともに、東日本大震災の後、近い将来、首都圏直下地震や南海トラフ巨大地震などによる大規模災害の発生も想定されている現在、既存の社会資本の維持管理だけで

なく、災害の復興・復旧とともに新たな災害に対する安全・安心の備えも大きな課題となっています。このような状況を踏まえ、平成25年度のテーマは「日本が元気になるための社会資本整備のあり方とは」としました。

応募校の内訳は、大学院4校、大学4校でした。海外(フィリピン・マニラ)からの応募があった他、国内では地方別で見ると、北陸(新潟)、関東(神奈川、東京、千葉)、近畿(京都)、九州(大分)から応募がありました。今回は北海道・中部・中国・四国地方からの応募はありませんでした。

分野別で見ると理工系からの応募が21編で最も多く、文系から2編の応募がありました。

応募の動機については、研究室内や大学内に掲示されたポスターのほか、公募サイト、担当教員からの紹介、夏休みの課題として出題されたものもありました。

論文の審査は、審査員である当協会の広報事業専門委員会委員(10名)が行いました。審査基準をもとに最初に各委員がそれぞれ全ての論文を評価した上で、全員の評価結果を集計・整理し、同委員会での最終審査会にて、表彰候補論文を選出しました。その上で、当協会の表彰委員会における審議を経て入賞論文が決定されました。

最優秀賞論文1編、優秀賞論文1編、佳作論文3編の講評は次のとおりです。

なお、入賞論文は、建設コンサルタンツ協会のホームページの「論文募集コーナー」の「入賞論文一覧」に掲載されています。

(<http://www.jcca.or.jp/achievement/article/index.html>)

■最優秀賞論文講評

「人間らしさを育む都市を目指して」(後に掲載)
高橋 利之(京都大学大学院)

社会資本整備の在り方を考えることは、人間(自然)の在り方を考えることと同義であるといった独自の視点から、社会資本整備を「風土性」や「格」という新しい切り口で論旨を展開しているのが独創的であると評価されました。アイデアの実現性にさらに論拠を充実し、読者の興味を持続させて読ませる配慮があれば、さら

に説得性を深めることができるでしょう。全体を通じて、オリジナリティのあるアイデアがユニークで優れた論理展開により記述されたことに審査員の評価は高く、最優秀賞に値するものでした。

■優秀賞論文講評

「高齢者特区制度の導入と社会資本整備」

松原 龍彦 (長岡技術科学大学大学院)

社会資本整備の効率性に重点を置き、都市部に高齢者特区を設けることで、社会資本整備の維持・整備費用の低減だけでなく、高齢者の安心や安全などを確保するメリットも得られるといった具体的な施策の提案が評価されました。特区制度の事例を結論の前に説明すれば、さらに読みやすい論文構成となったでしょう。課題に対して具体的な施策までを論じており、論理的な展開がなされていることから、優秀賞に値するものでした。

■佳作論文 (1) 講評

「災害が起こっても元気な日本であるには」

佐藤 大樹 (長岡技術科学大学大学院)

社会資本整備の災害時における副次的な被害低減効果や地域の抱える課題を自分の経験から論述しており、元気になるという問いに明確に答え、説得力がある内容でした。ただし、後半の地域特性を重視した街の活性化策の展開が論文として唐突感があり、前半の論旨を受けて実現するため課題を踏まえたアイデアを組み込んで展開すれば、さらに提案力と実現性を向上することができるでしょう。課題はあるものの佳作受賞に値するものでした。

■佳作論文 (2) 講評

「社会資本整備に向けた財源確保と情報収集についての提言」

雅楽川 朋大 (東京大学)

公募型SRI投資信託、住民参加型市場公募地方債、寄付金の活用による社会資本整備の財源確保策の提案と併せて、効果的な投資優先順位の決定のための地域情報データベース構築の提案が独創的で興味深いと評価されました。ただし、実現までの誘導方法、データベースの入力項目などを組み込めばさらに実現性と信頼性を向上することができるでしょう。課題はあるものの佳作受賞に値するものでした。

■佳作論文 (3) 講評

「みんなで築く “Humane JAPAN”」

川端 康正 (千葉大学大学院)

2020年東京五輪開催を契機に東京の再開発を実現するため、「調和と持続可能性」というキーワードをもとに、「緑のネットワーク」/「風の道」等の社会資本整備と人の関わりにおける既存のアイデアを活用した様々なファンドの創設案が高く評価されました。ただし、実現に向けての提案と考察を充実させれば、さらに実現性が向上するでしょう。課題はあるものの佳作受賞に値するものでした。

